



つなぐ場、つなぐ物、つながる人

慶應義塾大学総合政策学部教授 清水 唯一朗

過去と現在を、現在と未来をつなぐ場がようやく生まれた。塾史展示館が開館した際、強い安堵感と希望を覚えた。そうした場の不在が長く困りごとであったからだ。

今から28年前、世界がウィンドウズ95のリリースに沸く1995年11月23日、三田キャンパスでははじめてとなるキャンパスガイドツアーが開催されていた。主催したのは福利厚生団体のスチューデントカウンセラーズ(SC)。今や各地の大学で定番となったキャンパスツアーも、当時はまだ国内では先例のない先進的なものであり、アメリカ留学から帰国したばかりの先輩が三田祭の目玉企画として持ち込んだものだった。

ツアーの台本は三田に常駐する文学部2年の先輩たちが中心になり、広報室の(おそらくは福沢研究センターからも)協力を得ながら作成された。法学部の1年生だった私も歴史好きとおせっかい癖が嵩じて末席で関わらせていただいた。幸いにもツアーは好評を博し、三田祭が終わったあとも、広報室から依頼を受けて修学旅行生などに提供された。私にとっても学部・大学院生時代を通じて、研究の合間に高校生と談笑しながら楽しめる、ありがたいアルバイトになった。

ツアーが案内するのは、メディアセンター(の外観)、西校舎の掲示板、生協食堂と山食、大教室、研究室棟(の1階にある在室掲示)、塾監局(の外観)、福沢公園、そして旧図書館(の外観)だった。主な対象は高校生であり、学生生活がイメージできればよいということだったが、それにしても150年の歴史を持つ大学に来てもらいながら、それを感じられる場が少ないことが残念だった。たまりかねて旧図書館の扉を開けて、ステンドグラスの前に生徒たちを招き入れて解説をしていると、しばしば某所の扉が開いてお叱りをいただいた(その節はご迷惑をおかけしました)。

その後、広報室の調査役であった小鷲武光さんのご尽力で演説館をコースに入れていただけるようになり、状況はやや改善した。とはいえ、台本を少々アレンジした学部生の話ではなんとも心もとなく、来訪者に申し訳なく感じられた。同期には、演説館で朗々と「丘の上」を謳いあげる御仁もいたが。

心もとなさは大学院生になっても変わらなかった。日本政治史を専攻してはいたが、私の専門は明治後期から大正期の政官関係であり、義塾についても、福沢についても、通史のテキストを超える理解を持ちあわせてはい

なかった。少しは大人になり、義塾の公式見解も気になるようになった。同期の小川原正道さん、指導教授の在外研究中に仮親を務めてくださった寺崎修先生にそのつど教えていただきながら、なんとか薄氷を渡っていた。

それから10年ほどして、ある方のオールラウンドな歴史を旧図書館の小会議室で行うことになった折に、八角塔にあった展示室を案内していただいた。こんな部屋があったのかと驚いたが、やや無造作に置かれた乳母車や筆洗い、そしていくつかの文書の実物を見ながら受けた、要点を押さえながら間を取る説明は格別だった。義塾が歩んできた歴史のなかを自分も進んでいる感覚に包まれる思いがした。

同時に、ひどく反省した。かつて自分がかかわってきたツアーでは、ひたすら頑張ってしゃべり続けていた。それでは来訪者に思索をめぐらす余地はなかったと。とはいえ、悪いのはツアーの担当者でもなからう。限られたコースを補うべく必死にしゃべっていたのだから。この展示室のように、モノやテキストを眺めながら自分のペースで見て、それらと黙しながら対話することができれば、押しつけではない、補助線となる適切な解説があったらと話したことを覚えている。

それだけに展示館ができると聞いたときはうれしかった。しかも開設準備の中心になるのは、あのときにとても心地よい説明をしてくれた都倉武之さんだという。心が躍り、2021年7月、開館から時を経ずに訪ねた。妻と二人で2時間、じっくり満喫させていただいた。

それから三田キャンパスで研究会があるたびに学外の知人を連れていくようになった。昨年秋に入国管理が緩和されてからは、堰を切ったように来日する海外の日本研究者をご案内してきた。同行はするが、都倉さんに倣い、説明は各セクションの冒頭での導入にとどめ、あとはそれぞれのペースで見えていただいている。そうすると、どなたもそれぞれに関心があるモノや掲示されている解説を見て、自らの関心と結び付け、じっくりと対話される。30分くらいと言っていた方が、1時間、場合によっては2時間ほど滞在される。

気になるものがあったら声をかけてくださいねと伝えておくと、めいめいに所感を話してくれる。それに対して、こちらも考えを伝え、交換する。以下、展示に沿って、そうしたやりとりをいくつかご紹介していこう。

導入の動画はとても好評だ。学生たちはナレーションが

岩ちゃん(岩田剛典氏。塾員。三代目J SOUL BROTHERSのメンバー)であることに気付き、歓声をあげる。そして、彼の声で説かれる半学半教の精神に強くうなづく。インタラク션을軸に進む講義や、円形でディスカッションを深めるゼミの淵源と目的がそれぞれの腑に落ちていく。

研究者の方には松永安左衛門の蔵書が旧図書館にM系列として所蔵されていることをお話している。そこから派生して、ヨーロッパから来た日本研究者の方に橋川文三文庫(H系列)についてお話したところ、明治大学で教鞭を執っていた橋川の蔵書が慶應にあるとはと、見学を済ませてすぐに閲覧に向かわれた。

最初の角を曲がったところにある図書館の歴史の展示では、多くの方が溶けたステンドグラスに目を奪われる。1階で手古奈像の来歴について話し、ステンドグラスの意匠を解説したことがここでつながってくる。戦争の記憶アーカイブに取り組んでいた学生は、ここで戦争を体験された方に当時から持ち続けているモノを持参してもらい、それを話し手と聞き手の間においてインタビューを行うという手法を見出した。

「颯々の章」では、研究者よりも学生の方がヴィヴィッドに反応する。とりわけ、交換留学を予定している学生たちは自分たちの来し方とこれからに福沢の青年期を重ねるようだ。「ドヤ顔」とキャプションが付くサンフランシスコでの写真も、学生には発見や学びを形にした福沢の慧眼と映る。自己顕示と捉えてしまう自分の浅慮を反省させられる。

このパートの最後には「三十一谷人」の印鑑が置かれている。昨年、ここで福沢が江戸を33年、明治を33年生きたという解説を読んだ台湾の日本研究者の方が、二つの時代を生きるということについて話をはじめてくれた。学生も巻き込んで(海外からの日本研究者を案内するときは、必ずゼミ生に声をかけて同行している)話は広がり、ちょうど今年は明治一五四年、つまり日本は戦前と戦後を七七年ずつ生きてきたことをどう考えるかという議論につながった。

続く「智勇の章」には福沢が編み出した数多くのことが典拠と共に並べられているが、ここでは面白いことに日本人の政治学者が多く反応してくれる。政治制度、政治哲学、比較政治、政治コミュニケーションなど、それぞれの専門に刺激を与える言葉が並び、人間と政治に通底する問題意識を喚起される。なかでも「活用なき学問は無学に等し」は痛烈に響くようだ。

『文明論之概略』の版木のところでは、著作権の確立に向けて尽力した福沢の努力にみなさんが関心を示すな

かで、二次創作について研究する学生が、版木をコピーした人たちの地道な努力と創造性の欠如を指摘した。同行していたドイツからの研究者がとてもその指摘を面白がり、そこから近代の二次創作について話が広がった。

そのやりとりを横に、私はつい、この版木はそれなりに数があり、かつては海外大学と交流する際にプレゼントされていたという小咄に走ってしまった。だが、ここまで福沢の青年期の体験をトレースしてきた見てきた閲覧者にはそれさえも、慶應が伝統的にグローバルに展開しているという理解につながったようで、ある学生は、五カ条の誓文が掲げた日本の近代の理念を慶應が体現していると感じたと話してくれた。夢をもってよい。それを実現する社会を作る。そのために古い悪しき習慣は廃し、世界に知識を求めていく。その通りだろう。なお、この小咄の伏線は、続く大学部設置のところで回収される。

「独立自尊の章」では、学生も研究者も学徒出陣に引き寄せられる。ここで対話をした記憶はない。皆、自分のなかで自省し、言葉にならない言葉を心のなかで巡らせているのだろう。

最後に待つ「人間交際の章」では、前章にあった女子学生募集とその断念のパネルとの関連から、ジェンダーの話題が広がることが多い。福沢後の慶應が女子教育の意向を強く持っていたことは、現在の学生たちにも大きな後押しとなるようだ。

見学を終えたあとは、時間が許すかぎり、1階のカフェで感想を伺っている。一般の方は慶應の歩んできた道への所感を感慨を持って語ってくださり、新入生はその一員となった喜びを語り、2、3年生は自分の研究にどう活用できるかを生き生きと話し、4年生は自分のこれからの生き方と照らして論じてくれる。研究者はそれぞれのテーマとのつながりを闊達に議論してくれる。過去と未来をつながる場ができた喜びを改めて感じる。

こうして塾内外、国内外からの来訪者を案内していると、何度も実物資料と向き合うことを通じて、義塾と自分のありようを考える機会をもらっていることにも気が付く。塾長が近時しばしば「慶應義塾の目的」に言及されているのも、そうした経験がさせているのだろう。

「一身独立して一国独立す」「学問に凝るなかれ」「すぐに役に立つ人物はすぐに役に立たなくなる」「この人民にしてこの政治あるなり」。展示館で出会う言葉たちは、そのときどきの私たちに対話の蔭口を投げかけてくれる。展示館を訪ねることは、自分の過去を顧みて未来を想う、過去と未来をつなぐ歩みなのかもしれない。

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長	平野 隆	商学部教授
専任所員	西沢 直子	副所長、福沢研究センター教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授
所 員	朝倉 浩一	理工学部教授
(兼運営委員)	池田 幸弘	常任理事、経済学部教授
	武林 亨	医学部教授
	山内 慶太	常任理事、看護医療学部教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授
	大久保健晴	法学部教授
	大久保忠宗	普通部教諭
	大塚 彰	志木高等学校教諭
	小川原正道	法学部教授
	小山 太輝	幼稚舎教諭
	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭
	末木 孝典	高等学校教諭
	中西 聡	経済学部教授
	馬場 国博	横浜初等部長、湘南藤沢中・高教諭
	Millán Martin, Alberto	経済学部准教授
	藪本 将典	法学部准教授
	結城 大佑	女子高等学校教諭
顧 問	井奥 成彦	名誉教授
	岩崎 弘	元幼稚舎教諭
	小室 正紀	名誉教授
	坂井 達朗	名誉教授
	松崎 欣一	名誉教諭
	米山 光儀	名誉教授
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授
	飯田 泰三	法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授
	石井寿美世	大東文化大学教授
	石田 幸生	亜細亜大学准教授
	區 建英	新潟国際情報大学教授
	太田 昭子	慶應義塾大学名誉教授
	加藤 三明	慶應義塾名誉教諭
	金沢 裕之	防衛大学校准教授
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授
	川崎 勝	
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	曾野 洋	四天王寺大学教授
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授
	戸村 理	東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発室准教授
	平石 直昭	東京大学名誉教授

	平山 洋	静岡県立大学助教
	藤原 亮一	田園調布学園大学教授・図書館長
	前坊 洋	
	松岡 李奈	中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
	松沢 弘陽	
	松田宏一郎	立教大学教授
	三科 仁伸	拓殖大学准教授
	宮内 環	慶應義塾大学産業研究所兼任所員
	宮村 治雄	
	山田 央子	
	吉岡 拓	明治学院大学教養教育センター准教授
	林 宗元	韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
	Saucier, Marion	
	Nguyễn thị Hạnh Thục	Ho Chi Minh City University of Technology Lecturer
	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
研究嘱託	大庭 裕介	
	加藤 学陽	
	具 知會	東京大学インド哲学仏教学研究室 特任研究員
	小林 伸成	
	重田 麻紀	慶應義塾大学文学部古文書室研究員
	白石 大輝	桐蔭横浜大学特任講師
	柄越 祥子	
	巫 碧秀	Silk Road Cities Alliance Secretary General
	堀 和孝	関東学院大学非常勤講師
	山根 秋乃	
	横山 寛	福沢諭吉記念慶應義塾史展示館専門員
事務局	久我 竜二	事務長
	竹屋 早月	主 務
	内田 金蔵	同
	飯島 典子	事務員
	渋沢 彩佳	事務嘱託
	西村 真由	事務嘱託
	奥山 美樹	派遣職員
	岡部 敏和	非常勤嘱託
	柄越 祥子	非常勤嘱託

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、12名
(4月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第38号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2023年4月30日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1604
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所